

神郡宗像

第9号

平成ノ大造営

時満ちて
道ひらく

第5章 鎮西奉行時代

③ 元寇と宗像家



亀山上皇銅像 (福岡市・東公園)

亀山上皇は鎌倉

時代の正元一年

(皇紀一九一九、西

暦二二五九)に後深

草天皇の後を受け、第

九十代天皇に即かれ、文

永十一年(西暦二七四)

二十六歳で讓位、上皇と

なられます。

この時期に元とその属

国である高麗が文永・弘

安の両度にわたり、日本

に攻め寄せたのが元寇

(蒙古襲来)です。上皇は

この国難に際し「我が身を以つて国難に代わらん」



と伊勢神宮をはじめ、全国の神社・仏閣に異国降伏、戦勝を祈願されました。

現在の穏やかな福岡市からは全く想像もできませんが、十四万人の軍勢、四千隻の船という当時世界最大規模を動員した大艦隊が、福岡・佐賀に押し寄せました。当

大社の「みあれ祭」における船団の数が現在では約百隻ですので、その

四十倍の船数でこの国に襲来したと想像下さい。そして現在の福岡

と想像下さい。そして現在の福岡

第8号

第5章 鎮西奉行時代

- ① 色定法師
- ② 鎮国寺
- ③ 元寇と宗像家

第9号

第6章 九州探題時代

- ① 元弘の乱と宗像家
- ② 足利尊氏の九州落
- ③ 多々良浜の大合戦
- ④ 菊池武光と宗像家
- ⑤ 大内、宗像の親睦

第10号

第7章 群雄争覇王時代

- ① 鐘崎の御崎沈鐘引揚
- ② 戦国の世と宗像家
- ③ 宗像の古城跡
- ④ 黒川刑部
- ⑤ 陶晴賢と宗像家
- ⑥ 山田の増福院
- ⑦ 宗像氏貞
- ⑧ 許斐城
- ⑨ 葛ヶ岳城

第11号

第12号

- ⑩ 大友・宗像大合戦
- ⑪ 飯盛山合戦
- ⑫ 氏貞の最後

第8章 小早川時代

- ① 豊臣秀吉の筑前入国
- ② 小早川隆景

市東区と西区の沿岸部、志賀島、佐賀県の沿岸部で、国家の存亡をかけた戦闘が行われました。

これまでも九州沿岸部は新羅、高麗、刀伊など朝鮮半島や大陸の国々により、何度も襲撃を受けていましたが、ここまで大規模の国土侵攻は有史以来初めての経験であり、資料は少ないのですが、その時

九州の御家人や宗像の人々はどう奮戦したかに触れていきます。

宗像大宮司家では宋と貿易を行い、僧侶や商人の往来など通交は盛んに行われ、現在の福岡市内や福津市津屋崎には唐人街(外国人街)ができていました。しかし、あくまで私的貿易であり、初めて武士が

政権を担った鎌倉幕府の下でも、日宋間の正式な国交は開かれていませんでした。

その様な東アジアの国際情勢のなか、鎌倉時代の初めモンゴル高原にチン

ギスルハンが現れ、モンゴルの諸民族を統合すると瞬く間に中央アジアから南ロシアまでを征服、広大なユーラシア大陸の東西にまたがる大帝國を建設しました。

その孫のクビライハンは、南宋を支配下に治めるため都を大都(現北京)に移し、国号を元と定めると高麗(朝鮮半島)を全面的に服属させ、日本に対しても度々朝貢を強要してきました。

文永の役

この時日本は北条氏が執権政治を行っており、時の執権は第八代の北条時宗でした。当時外交は朝廷が担っていたため、幕府は朝廷と協議し訪日した使者への返答を拒否し続けました。

すると文永十一年(西暦一二七四)、元は高麗の軍勢をあわせた九百

艘の船に二万五千人の兵を乗せ押し寄せました。まず対馬次いで豊岐を蹂躪し、十月十九日宗像の沖から博多付近一帯に現れました。

日本側は異国警固番役に任命された小弐氏や大友氏を中心に、博多の浜には九州各地より五千数百人の御家人や地頭が集結。この時の大宮司第四十八代の宗像長氏は、総帥であった小弐経資に属し、宗像の郡民を率いて郷土沿岸の防備に



現在も残る「元寇防塁跡」(福岡市西区生の松原)



あたりました。

翌十九日、元・高麗軍は二手に分かれ、元軍主力二万は管崎・博多方面、高麗軍を中心とした残り五千は西方の祖原(福岡市早良区祖原公園)や百道原(上陸地は諸説あり)に上陸しました。

午前十時頃より戦闘に入り各地で激戦となり、管崎宮も兵火にかり灰燼に帰し、博多の町家もほとんど焼き失せました。現在は官庁やビルが立並ぶ福岡市中央区の赤坂から鳥飼までが、「鳥飼潟の戦

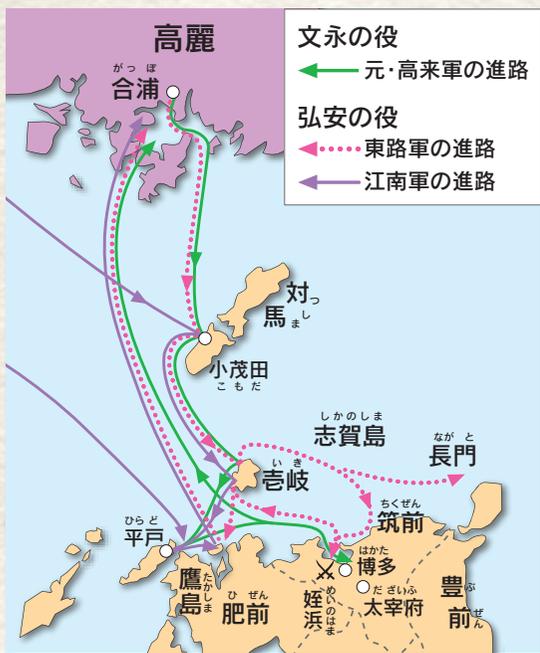
い」と呼ばれる主戦場で日本軍が総力をあげた文永の役における一大決戦でした。

戦いは元・高麗軍優位のまま夜に入りますが、夜襲を恐れたのか前線基地を設けることなく、占領地を離脱し全軍が船中に引き揚げました。するとその夜、のちに「神風」と呼ばれる暴風雨(台風)が吹き荒れ、数万の大軍のほとんどが風にさらわれ、博多湾から忽然と姿を消しました。宗像の沖でも二艘が座礁していたという記録もあり、

元・高麗軍の死者は一万三千五百人、日本兵は未定で数百人とされています。

とはいえ、この撤退は謎が多く一説には日本側の大将・小弐資能の次男小弐景資の放った矢が、二人いる元軍副司令官の一人を射抜いたため、或いは武器や食料の補給がうまくいかなかった、九州の御家人たちを中心とした日本軍に予想以上の抵抗を受けたなどの理由で撤退したとされています。

文永の役
← 元・高麗軍の進路
弘安の役
← 東路軍の進路
← 江南軍の進路



弘安の役

筆舌に尽くしがたいほどの凄惨を極め、高麗の歴史書によると博多上陸前の戦場であった対馬では住民を皆殺しにしたこと、吉岐での生存者は六十五名のみであったことなどが記されており、実際元軍の総司令官が捕虜とした日本人の子供二百人を奴隷として高麗国王に献上しています。

後宇多天皇の建治元年(皇紀一九三五、西暦二七五)、文永

の役の翌年には元はまたも使者を送り朝貢を迫りました。執権北条時宗は使者を斬捨て断固たる処置に出ると同時に九州沿岸の警備を強化すべく、福岡市西区今津、東区香椎までの五里余りに防塁を築かせました。

元は文永の役後も八回にわたって使者を送ってきましたが、幕府はその度に使者を斬り屈しない姿勢をとります。そして文永の役より七年後の弘安四年(皇紀一九四二、西暦一二八一年)、高麗を中心とした



蒙古司矢 (管崎宮蔵)

弘安の役における元・高麗軍進路



まず、東路軍が対馬、杵岐を再び蹂躪し侵攻します。しかし、日本は文永の役後博多湾岸を覆うように約二十キロの防塁を築いており、元軍（東路軍）は上陸を断念し志賀島を停泊地とします。これに日本側は陸海から迎撃し、東路軍は杵岐へ後退し江南軍の到着を待ちました。

予定期日を過ぎても江南軍が到着する兆しはなく、この間に船内で疫病が発生し三千人が命を落としました。ここで日本側はさらに杵岐まで迎撃に向かい、杵岐から東路軍を駆逐します。

杵岐を追い出された東路

朝鮮半島の合浦を出港した東路軍四万人（九〇〇艘）と、寧波（現在の浙江省寧波市）を出港した元軍本隊である江南軍十万人（三、五〇〇艘）合わせて十四万人という、元寇以前では世界史上最大規模の大艦隊で押し寄せました。

本は文永の役後博多湾岸を覆うように約二十キロの防塁を築いており、元軍（東路軍）は上陸を断念し志賀島を停泊地とします。これに日本側は陸海から迎撃し、東路軍は杵岐へ後退し江南軍の到着を待ちました。

軍は、博多湾到着期限の六月十五日より一ヶ月以上も遅れて佐賀県の平戸に到着した江南軍十方に合流しました。

平戸で合流し同二十九日に大艦隊となった元軍は、伊万里湾の鷹島へ船団を移動させます。しかし、同三十日未明台風が襲来し、停泊していた元軍の軍船四千隻のうちほとんどが沈没、損壊するなどの大損害を被り残存艦船はわずか二百隻であったという「神風」が起きます。東路軍が日本を目指し朝鮮半島を出航してから約三ヶ月、博多湾に侵入し戦闘が始まって約二ヶ月のことでした。

そして、戦闘の舞台は志賀島、杵岐から伊万里湾へ移動します。日本軍は御厨海上合戦で伊万里湾に残っていた元船を一掃、すると鷹島に停船していた元軍諸将は、あえて



兵員を船から降ろし帰還してしまいます。日本軍は鷹島に残

された十万余の元軍と僅かに残る元船を掃討。二万人が捕虜となって博多に送られました。元・高麗人は処刑、交流のあった南宋人の命は助けられたと伝えられています。尚、現在は飛行機も鉄道もありわずか一日で行けますが、当時の



宮崎宮楼門と「敵國降伏」の扁額

移動手段は馬、船位で大宰府へ鎌倉間は十二日半かかったようです。そのため博多から知らせを受け、九州へ派遣した軍勢六万人が到着する頃には、全ての戦闘が終結していたのは言うまでもありません。

元寇後

弘安の役で元・高麗軍のうち、本国へ帰還できたのは全軍の一〇四割という大損害を出し、元は海軍戦力の三分の二を失うこととなりました。にもかかわらず、フビライは晩年まで日本遠征を諦めることなく、驚くことに敗戦の翌年にまた使者を送ります。日本で仏教が普及していることを知ると禅僧を使者にし、西暦二二九九年まで十二回にわたって朝貢を

求める使節を送り続けましたが、日本が応じることはありませんでした。

一方日本でも命をかけて戦った九

州各地の御家人の人的、経済的損害に対する恩賞の少なさから、鎌倉幕府(北条氏)に対する不満は蓄積されていき、建武の親政、南北朝



亀山上皇奉安殿 (箱崎宮境内)

の動乱へと向かっていきます。

宗像家においては、正応二年(西暦一二八九)、宗像長氏(第四十八代大宮司)は軍功として肥前国神崎荘(佐賀県神埼郡)五町分を宛がわれました(宗像家文書惣目録)。これはこの役における第二級の恩賞であり、長氏の戦功が並々でなかったことを物語っています。

箱崎宮においては、戦後炎上した社殿の再興にあたりますが、亀山上皇は「敵国降伏」の御宸筆(ごしんぴつ)を同宮に納められています。現在もその四文字が国指定重要文化財の楼門に掲げられています。

また、福岡市博多区の東公園(福

岡県庁向かい)には、亀山上皇の銅像が建てられています。これは明治十九年(西暦一八八六)、湯地丈雄(たけ)という熊本出身の方が福岡に警察署長として赴任した際、博多湾沿岸が元寇史跡古戦場であったにもかかわらず、その記念碑が一切なかったことに憂いの念を抱きます。そして警察署長を辞して取り組み、明治二十三年に建立が決定、同三十七年に完成しました。

尚、この像の原型となった木像は、明治三十五年(西暦一八九〇)に博多出身の彫刻家・山崎朝雲によって制作され、現在は福岡県指定文化財となり、箱崎宮内の奉安殿に納められています。



東公園にある亀山上皇像の原型となった像。現在は箱崎宮境内の奉安殿に祀られている。

亀山上皇御尊像 (木像)



東公園の亀山上皇像 (銅像)

第6章 九州探題時代

第六章より九州探題時代に入ります。蒙古襲来を受け、鎌倉幕府は沿岸警備、九州地方の政務、御家人の指揮にあたるため鎮西探題を現在の福岡市内に設置、室町幕府も踏襲し、九州統治にあたらせた出先機関が九州探題です。

本章は第九十一代後宇多天皇元年(皇紀一九三五、西暦一二七五)に、北条実政が鎮西探題として姪浜に居城した年から、第一〇一代後花園天皇嘉吉元年(皇紀二二〇一、西暦一四四一)の九州探題廃止の年までの約一六六年間を指します。

① 元弘の乱と宗像家

元寇と混同しそうですが、元弘の乱とは元弘元々三年(西暦一三三二)の後醍醐天皇を中心とした勢力による鎌倉幕府倒幕運動を指します。

元寇後、様々な権限を朝廷より得た執権北条氏は、西国一帯への影響力を高め得宗専制政治を行うようになり、全国の守護の半分以上がその一門で独占するようになり、御家人をはじめ各地から不満が爆発します。

第九十六代後醍醐天皇が天皇親政を目指して立ち上がる、北条高時討伐の乱が起きるや各地に拡がり、新田義貞、楠木正成、名和長年らは忠勤を励み、敵兵を散々に打ち破りました。

九州の地も幕府側と官軍に分かれた戦場となり、時の大宮司宗像長氏は無論官軍に加わり、元弘三年五月二十五日筑前の小弐氏、豊前の大友氏とともに九州探題の北



条秀時を滅ぼしました。

次いで建武元年(西暦一三三四)春に北条氏の一族、高政が秀時の余類を集めて、筑前帆柱城(現北九州市八幡西区帆柱山)に立て籠もったので、大宮司長氏は之を攻め落とし、なお進んで長州に向かい前探題の北条時直の残党を攻め軍功を上げました。

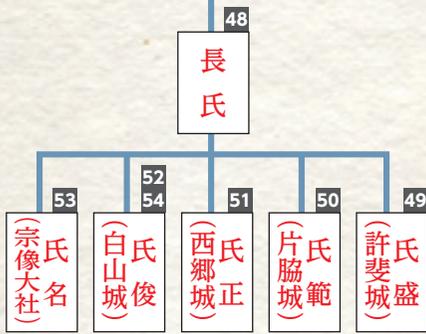
生会(じょうえ)という仏教行事ですが、現在も秋季大祭(例祭)として、三宮の神輿が総社である辺津宮に集う神事は継承されています。

そして長氏は動乱の時代を予期し、白山城(宗像市山田)、片脇城(宗像市田島)、許斐城(宗像市丸)、西郷城(福津市上西郷)を築き、この神郡宗像の防備を固めま

この第四十八代大宮司の長氏は指導者としても優れ、前項の元寇時にも宗像一族郎党を引き連れて大活躍し、五十余年というこの時代には異例の長きにわたって大宮司を務めました。

在職中は寂れた宗像三宮の各社殿を修造、神輿も新たに製作し「田島放生会」を始めました。この時代は神仏習合の時代のため「放生

宗像大宮司系図 48代~54代迄



す。
 そして太郎氏盛(長男、四十九代)を許斐城に、次郎氏範(次男、第五十代)を片脇城に、三郎氏正(三男、第五十一代)を西郷城に置き、長氏自身は白山城に居住し四郎氏俊(四男、第五十二・五十四代)を宗像大宮司の家督にしました。
 さらに長氏は兄弟間での家督争いを防ぎ、相互の怨恨を絶つため兄弟四人とも一度は大宮司職に任じました。そして文武の道に秀でた四郎氏俊が家督となり、この神郡宗像は中世の争乱に巻き込まれていきます。

② 足利尊氏の九州落

後醍醐天皇の建武元年正月、宗像氏俊(長氏四男)は、兄氏正(長氏三男)の職事を継ぎ、第五十二代の大宮司に就任しました。

宗像大宮司家は氏国(第三十六・三十八・四十・四十二代大宮司)以来、神職でありつつ武家的色彩を濃くし、この時代は鎌倉幕府御家人の列に加わり、四季の祭礼は弟の氏名(五十三代)に任せ、氏俊自らは政治と戦に明け暮れ、宗像の地を守り抜くことに心血を注ぎました。

この時、京都では鎌倉幕府が朝廷監視、都の警備、西国統括のために設置した六波羅探題が落ち、後醍醐天皇により王政復古となり「建武の親政」が開始されました。ところがそれまでの慣習を無視した天皇中心の急激な改革は、政務の停滞や社会の混乱をまねき人心を失っていきました。

すると鎌倉幕府滅亡の勲功第一であった足利尊氏が、建武政権から離反。追討令が出され、建武二年

(西暦一三三五)二月、尊氏は京都の合戦に新田義貞・楠木正成に大敗。豊後・大友の勧めもあり九州まで落ちのびました。

筑前の多々良浜(福岡市東区多の津)に着いた時、配下の者はわずか三百余人に過ぎませんでした。これを聞いた大宮司宗像氏俊は、一族郎党を呼び集め官軍に属し多々良浜へ討ち出で、公家の政道正しからずと、尊氏に仁義をかけ宗像の白山城へ案内しました。

翌日尊氏は小式頼尚を味方にする、筑前の国人麻生、山鹿、豊田、嘉麻、香月、杉の諸族は続々と尊氏の下に馳せ参りました。

この「神郡『宗像』が歴史の補助教科書として使われていたのは昭和十六年、その当時は尊氏の名を出すことすらはばかれる時代であったようで、原文では尊氏やそれを支援した当時の大宮司氏俊を、「大義明分をわきまえず、郷土に汚点を残し・・・」とまで断じています。

この尊氏逆賊との評価は近世の水戸学に端を発し、幕末には京都で尊氏、義詮、義満三代の木像の首を切り落とす事件(足利三代木像梟首事件)も発生しています。

近年の評価は、カリスマ性が高く人柄が良く、裏切った者でも降伏すれば許すなど、多くの家臣に慕われていました。そのため周囲に気を使っている、その影響を受けやすく決断力に欠け、その上苦しい場面になると放り出してしまおうという、無節操な傾向があったようです。

後醍醐天皇に背き、朝敵になったことを生涯悔やみ、戦で苦戦するとすぐ切腹しようとして家臣を慌てさせる。出家を望んでいたなどのエピソードもあり、引つ張っていたリーダーというより、周囲が支えたリーダーのようです。

次号は「③多々良浜の大合戦」からです。戦場となったのは現在の福岡市東区多の津、多々良小学校向かいの多々良川を挟んで、福岡流通センターとなっている場所で行われました。

神郡宗像

撰末社めぐり

⑨ 伊摩神社

御祭神

応神天皇(おうじんてんのう)

武内大臣(たけうちおおおみ)

事代主命(ことしろぬしのみこと)

素盞鳴命(すさのおのみこと)

境内社

五穀神社
(保食神 火産靈神)

鎮座地

管理 宗像市吉田

由緒

伊摩神社は宗像大社の兼務する九社の一社で、辺津宮より東へ一キロ、吉田区の産土神です。

正長元年(一四二八)の創建と伝えられ、元は吉田字今ヶ浦(いまがうら)に鎮座していました。

大正十五年五月五日に吉田字安入寺に鎮座する織幡神社(宝永元年・

現在、総社・辺津宮の本殿を囲むように、22の社殿に127神がお祀りされています。これらはかつて神郡宗像各地にお祀りされた撰末社の分祀社です。宗像・福津・宮若各市、遠賀郡を中心とした地域の現地各社は、大宮司宗像家断絶後、当大社の管理を離れ、現在宗像大社で管理する神社は辺津宮周辺の九社のみです。なかには鎮座他不詳の神社もありますが、大部分の神社には奉務される神職が別にいらっしゃいます。

当大社の撰末社であった名残は、撰社格の神社の例祭時には当大社より神職が献幣使として出向、祭詞(祝詞)を奏上する形で今日も継承されています。



お熨斗あげ



一七〇四に鐘崎より勧請へ遷されると共に合祀され現在に至ります。同じように区内に鎮座していた恵比須神社、須賀神社ほか数社も元の地より遷され合祀されました。

一七〇四に鐘崎より勧請へ遷されると共に合祀され現在に至ります。同じように区内に鎮座していた恵比須神社、須賀神社ほか数社も元の地より遷され合祀されました。

例年九月の宮座祭は、区長を始め多くの総代・氏子が参列し、区を上げ賑々しく斎行されます。祭典後には、神酒拝戴に先立ち、飾り立てられた熨斗あわびを区長が代表して戴く「お熨斗あげ」という珍しい慣習も残っています。

編集後記

今回は宗像大社の歴史資料の乏しい中でした。まず、数多くの写真を提供いただきました菅崎宮様には厚く御礼申し上げます▼「元寇」にここまでページを割く予定ではありませんでしたが、驚くことが多々あり詳しく取り上げました。この史実をCG等で再現すると、我々の思い描く以上に震え上がる程の規模であったことでしょうか▼宗像大社の祭祀とこの地域を守るため、神職でありながら武家化した宗像一族は、この困難に際し小弐、大友と行動をともにし、この国を守ろうと戦いました▼時が経ち国内でもその史実が忘れ去られた明治になって、国民意識を憂いた当時の福岡警察署長により、東公園の亀山上皇御尊像はつくられます。この方は職を辞して銅像建立に奔走しました。このことをご存知の方は、福岡市民でもどれほどいらっしゃるのでしょうか。少し気になりました。(塚)

テレビ放送のご案内

TBS系列28局ネット 全国放送
12月13日(日)15時30分～16時54分
(仮)二出光佐三と宗像大社(タイトル未定)
芥川賞作家の又吉直樹氏、直木賞作家の西加奈子さんが、宗像三宮を参拝します。

発行所 宗像大社

発行日 平成二十七年十二月一日
住所 千八一―一三五〇五
福岡県宗像市田島三三三二
電話 (〇九四〇六二)三二二一代
発行人 葦津 敬之
制作・印刷 セネラルアサヒ